管内産の「あきたこまち」「ひとめぼれ」を対象に、毎年行われている当ＪＡの「美味しい米」コンクール。令和３年度の「あきたこまち」の部では、秋田市河辺の石塚正久さんが最優秀賞に輝いた。岩見川沿いの山間地で「あきたこまち」とカボチャ、スナップエンドウの栽培に取り組む石塚さんの、品質の向上に日々尽力する姿を伺った。

栽培方法を見直し効率化

兼業農家として稲作をしてきた石塚さんは、定年退職を機に父親から農業の経営主体を引き継いだ。長年使っていた田植え機を更新することになり、併せて育苗方法も変更。知人から話を聞いていたプール育苗方式で苗づくりを始めた。

同じく定年退職をきっかけに、稲作だけではなく野菜の栽培も始めた。３～４月はカボチャやスナップエンドウの播種期と重なるため、水稲の発芽苗をＪＡから購入することで、省力化を図っている。「育苗方法を見直してから、苗の生育が安定し、収量の増減が少なくなりました。春先の管理の負担も軽減されました」という。

常に学び品質向上に繋げる

これまで父親がやっていた方法に倣って

いた肥料や農薬の体系も、プール育苗を始めてから見直した。営農相談会などで情報を取り入れ、側条一発肥料を使って施肥回数をこれまでより減らすなど、散布作業の負担を軽減した。「あぜみち研修も勉強になります。穂肥のタイミングに迷っていましたが、ＳＰＡＤ値の数字で判断できました」と石塚さん。各種研修会にも積極的に参加し、栽培技術や最新の情報を取り入れている。

石塚さんが同コンクールに初めて応募したのは、令和２年度のこと。初の出品でありながら、見事敢闘賞に輝いた。「上位賞とは点差がありましたが、自分の米の分析結果などのデータを見たら、まだ修正して伸ばせるところがあるから、もっと頑張ってみようと思いました」という。現状をさらに改善しようと学び、努力する姿勢が、今回の最優勝賞に結びついた。

喜んでもらえるおいしい米をこれからも

「美味しい米」コンクールの出品条件のひとつに、「こだわり米」で栽培することがある。石塚家では、父親の代から長年「こだわり米」の栽培を続けてきた。「消費者は購入するとき、安さやおいしさで選びます。せっかく稲作をするなら、おいしくて売れる米を作るほうがいいと思っています」と石塚さんは話す。

「まさか最優秀賞とは」と笑顔を見せる石塚さん。多くの人から反響をもらい、特にいつも石塚さんの「あきたこまち」を食べている孫がお祝いしてくれたことがうれしかったという。「これからも、子どもたちに喜んでもらえる米を作り続けていきたいと思います」と、今年の稲刈り作業を前に意気込んだ。

出品２年目で「美味しい米」コンクールの最優秀賞に輝いた石塚さんは、品質や農作業の効率をよりよくしようと、情報を各所から吸収しながら、日々努力されています。基本に忠実で、かつ向上心のある栽培管理への姿勢が、賞の結果にあらわれました。

秋田地区営農センター
関口 直樹 主任